

綿布、うつわ、クラフト教室 時代にあわせた業態で、街角ににぎわいを

せきね ちろうし
関根 忠史
(株)わた忠
代表取締役社長

1969年、さいたま市岩槻区生まれ。明治大学商学部卒業後、清水焼商社に就職。京都で日本文化のルーツや、陶磁器への見識を深める。1995年、(株)わた忠入社。2008年社長就任。関根家の長男は代々「忠」の文字を引き継いでいる。

せきね まゆみ
関根真由美
(株)わた忠
取締役

1970年、東京都江東区生まれ。青山学院女子短期大学卒業後、損害保険会社を経て1996年に(株)わた忠入社。2021年取締役就任。



城下町・岩槻で江戸時代から続く長い歴史を誇る(株)わた忠。その名の通り綿の仲買業から始まった社業は、代を重ねる中で大きく変化した。堅実に、そして柔軟に。時代にあわせて進化しつづける老舗の心意気を、13代目・関根忠史社長と、妻でありよき経営パートナーである関根真由美取締役に伺った。

訓と共に、私は2008年に13代目として事業を引き継ぎました。

現在当社は、日本各地の窯元から買い付けたこだわりの器を販売するセレクトショップと、ちりめん細工のクラフト教室を運営しています。この教室を始めたきっかけは、地域の一大行事である「人形のまち岩槻まちかど雛めぐり」でした。20年以上前に第1回が開かれたとき、懇意にしていた人形作家さんに請われ、会場を飾るちりめん細工の手配をしたところ大好評で、イベントが終わっても展示を続けることにしたのです。

創業は江戸中期。230年にわたり岩槻の地で



大正～昭和初期の店舗にて。10代忠蔵(右)11代忠七(左)結納の写真と思われる。

「わた忠」というのは、綿布の仲買人をしてきた初代がつけた屋号で、創業は江戸・寛政年間(1790年代)と伝わっています。

以来230年、岩槻で商いを続けているわけですが、かつての綿や布から、うつわを扱う店になったのは、9代目・忠吉の頃でした。

大正期の繊維産業の衰退を見て、より堅い商売をしようと考えたのでしょう。やがて「瀬戸物・陶器のわた忠」と評されるようになり、現在まで続く事業の柱となっています。

私の父である12代目・忠一は、日用品だけでなく、人生を彩るような良質な器を扱える店になりたいと、

そのうちに「自分でも作ってみたい」という方が増えたことから、店の一角で教室を開くことになりました。最初は人形作家さんが講師を務めていましたが、今では妻とベテランスタッフが指導役を務めています。

教室はすべて1回ごとの予約制。いつ来るかも、何を作るかも、作業するペースも生徒さんの自由です。日常を離れ、気の合う人と楽しくおしゃべりしながら、美しい布や糸に触れるひとときはとても癒されると好評で、長い方はもう15年以上通っていらっしゃいます。

集い、楽しむ人の輪を、いつまでもこの街に

教室では一服の時間があり、妻がつくった軽食を提供しているのですが、その時にはもちろん私が選び抜いた美しい器に盛りつけます。教室をきっかけに、空間デザインやテーブルコーディネートに興味を持ってくださる生徒さんもいて、よい相乗効果を生む二本柱となっています。

教室を開くもう一つのメリットは、いつも人がいて、にぎわっている雰囲気が外に伝わることでしょう。「商売は人気がない」というのは、東京の活気のある商店街から嫁いできた妻のポリシーですが、実際その通りだと私も思っています。

歴史ある岩槻の町も、高齢化やベッドタウン化で、平素は人の行き来もゆるやかです。当店はその一角で、人が集まり、にぎわいの輪をつくりだす場であり続けたいと願っています。

結婚式の引き出物などの進物サービスにも乗り出しました。また、さらに、全国の窯元や作家さんとのご縁を広げてくれました。純和風でありつつ、明るくモダンな雰囲気をたたえた現店舗への建て替えを決断したのも、父の時代です。



伝統工芸であるちりめん細工づくりを習う皆さん。干支やベットの、好きなテーマでマイペースに楽しんでいる。

まちかど雛めぐりをきっかけに始まった新事業

「借金せず、腹八分目で、商いは飽きないように」。そんな家